

1 学校評価（児童・保護者・教職員）アンケート結果

- ・ 別紙資料を参照しながら以下をご覧ください。

2 学校評価（自己評価）

田村市立船引南小学校教育目標

豊かな心とたくましい体を持ち

夢輝かせたゆまず努力する子どもの育成

(1) 全般を通して (※アンケート問 1 ～ 2)

児童の多くは、楽しく学校生活を送っていることがうかがえる。児童一人一人は、かけがえのない存在である。教職員が児童一人一人に正面から向き合い、心を寄せながら、どうすれば目の前の児童がよりよく生きる力を高めることができるのかに努めてきたことへの評価と受け止めている。

将来の夢や目標に関しては、昨年度に比べ保護者の肯定的評価が上昇していることから、学校からの情報発信が一定程度の効果がみられたこと、また、家庭での親子の会話の中に学校での出来事を話題にする時間が増えたことなどが考えられる。学校と家庭が協働して子どもを育てていく基盤がより強固なものとなるよう今後も丁寧かつ確実に取り組みを推進していきたい。

(2) 学習面について (※アンケート問 3 ～ 6)

『学び合うことの楽しさを実感し、学習に主体的にかかわる子どもの育成 ～「読み解く力」の育成を目指した授業づくりを目指して～』を本校の教職員研修のテーマに掲げ、一年間取り組んできた。

「読み解く力」を育成するために板書の仕方を工夫したり、意図を明確にしてチョークの色を選択したり、教室掲示を工夫したり、ICT 機器を活用したり、ペア・グループ学習を取り入れたり、適用問題に取り組んだり、児童の学びを支え「分かる」「できる」につながる授業を展開できるよう努めてきた。授業における児童の話し合い活動への参加の姿勢も向上していることから、これらの学校の取り組みが評価された結果と受け止めている。

一方、家庭学習への取り組みに関しては、より丁寧に状況を見ていく必要がある。学習時間という「量的」なものと、学習内容という「質的」なもののバランスに焦点化することで、より効果的な家庭学習の在り方を学校と家庭の協働のもとで模索していきたい。

読書に関しては、児童と教職員の評価が低下している現状から、学校で設定している読書の時間の実態や教職員の読書活動への取り組みの現状を把握するとともに、その実現に向けた手立てを再考することが必要である。保護者の評価が昨年度と同様であることから、読書の「習慣化」に向けて、学校と家庭での連携の仕方を工夫することが求められている。

(3) 礼儀・思いやりについて (※アンケート問 7 ～ 9)

あいさつ及び思いやりに関しては、「他者意識」がキーワードとして挙げられる。「相手にとって気持ちのいいあいさつはどうか」「相手にとってどういう言葉をかける／態度をとることが、相手を大切にする（相手に対する敬意を表す）ことになるのか」ということを、さらに深く掘り下げていくことで、相手に対する敬意を表したあいさつや態度につなげていきたい。

社会のきまりに関しては、おおむね良好な評価が得られている。ただ、よりよい児童の育成を目指すために、児童が受け取っている評価と教職員が実感している評価がやや乖離していることが推察される点に注目したい。教職員は児童の姿を見取り・意味づけ・価値づけ・称賛しているつもりであっても、児童にはこのことが伝わり切っていない可能性が示唆されている。まずは教職員が時機を逃さず児童の姿を見取り・意味づけ・価値づけ・称賛することを、改めてきめ細やかに実践していく。後になって児童の善行が判明した際には、学級等で適切な環境を整えた上で児童に意図が伝わるように丁寧な説明と称賛をしていくよう努めていく。児童に関わる全ての大人の言動が児童の価値観を育んでいくという認識のもと、学校と家庭が協働して責任を果たしていきたい。

(4) 健康・運動について (※アンケート問 10 ～ 13)

規則正しい睡眠の確保とメディアコントロールに関しては、児童の自我の形成と家庭（保護者）の関りを見つめていきたい。メディアは私たちが上手に活用することで、より豊かな生活を創造することができるものである。児童の自我の形成に伴い、メディア活用の幅が広がってくる。メディア活用の幅が広がることで知識の獲得や情報処理能力の向上など様々なメリットが挙げられる一方で、健康被害であったりメディアリテラシーや情報モラルの欠如が原因のトラブルであったりといったデメリットも報告されている。児童の主張の正当性に対して、家庭（保護者）の判断の妥当性を示すことで、家庭におけるメディア活用のきまりが明確になり生活に規則性が形成され、睡眠時間が確保できるようになると考える。

食事と運動に関しては、「習慣形成のための一歩」を学校と家庭の連携により進めていくことが必要である。食習慣の形成のためには、多様な食材・料理との出会いとともに栄養のバランスを考えること、運動習慣の形成のためには、多様な運動を経験するとともに保健・健康の知識を獲得していくこと。学校では給食や家庭科の学習を通して食習慣について考えたり、各種行事や教科体育の学習を通して運動習慣について考えたりしていく。学校での学びや経験が家庭生活を豊かにしたり、家庭での学びや経験が学校生活を豊かにしたりする相互補完の関係を築けるように努めたい。

(5) 学校運営等について (※アンケート問 14 ～ 23)

学校運営に関しては、おおむね高い評価をいただいたと考えている。学校としては、「いじめがない温かな学級づくり」と「子どもたちの悩みや相談への対応」について、「自分の居場所」という観点から改めて見つめていきたい。(1)にも述べたように、教職員は児童一人一人に対して正面から向き合い、心を寄せながら接してきた。ここで再考したいのは、児童がどう受け止めているのかをより一層想像力を発揮して見つめていくということである。教職員のかけた言葉やとった態度を、児童が納得感をもって受け止められるように、発達段階に応じてきめ細やかに対応するよう努めたい。その中で、児童の思いに耳を傾けること、公正公平に対応すること等を通して受容的で支持的な学級風土を醸成することで、児童が安心して過ごすことができる学級を「自分の居場所」として感じられるようにしたい。

(6) 総括

アンケート全体を通して、いずれの項目でもおおむね高い評価をいただいたことは、「地域とともにある学校」を目指し取り組んできた学校運営への評価であると受け止めている。今後も関係諸機関及び地域人材とのつながりと大切にしながら、地域にとってよりよい学校の在り方を探っていく。